慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	総ルビ表記の中の漢数字：『南総里見八犬伝』を中心に
Sub Title	Chinese numerals appearing in the texts fully annotated by ruby glosses : focusing on Nansō Satomi hakkenden
Author	片山, 久留美(Katayama, Kurumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.1 (2022. 12) ,p.178 (51)- 193 (36)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	屋名池誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

総ルビ表記の中の漢数字
――『南総里見八犬伝』を中心に

片山久留美

1. はじめに

近世から近代にかけて見られる「総ルビ表記」の資料では、ほぼすべての漢字にルビが付されているが、ルビがない漢字が少数ながら存在する。その一つが漢数字[i]である。

本稿では、江戸時代の読本である『南総里見八犬伝』を中心に、総ルビ表記の資料における漢数字とルビの関係を考察する。数詞として漢数字が用いられる場合、その他一般の語の表記とは異なり、記数法に従った数詞独自の表記が取られている可能性がある。ルビの付された漢数字とルビのない漢数字の使用傾向を精査することで、総ルビ表記資料における数詞の表記の特徴を明らかにする。

2. 先行研究と問題意識

日本語の数詞は、語種の観点から和語数詞・漢語数詞に分類することができる。和語系統の数詞として、1から10までを表す「ひと・ふた・み・よ・い(つ)・む・なな・や・ここの・とお」および10の倍数を表す「はた」「みそ」「よそ」など、100・1000を表す「もも」「ち」などがある。また、漢語系統の数詞として「イチ・ニ・サン・シ・ゴ・ロク・シチ・ハチ・ク・ジュウ」がある。和語系統の数詞の場合、単独で用いられることはほぼなく、「～つ」「～ち」「～り・たり」などの助数詞を伴って使用される。安田（2015）では現代の和語数詞の分類として、個数詞・日数詞・人数詞・唱数詞の4系列を挙げている。一方、漢語由来の「イチ・ニ・サン・シ・ゴ・ロク・シチ・ハチ・ク・ジュウ」は

単独でも文中に現れることができる。また、後ろに助数詞などの接尾要素を伴って現れることもある。

日本語の古典資料における数詞の研究では、数詞がどのように読まれていたかという点が問題になることが多い。漢数字で表記された数詞は読み（語形）が明示されることが少ないため、仮名表記例や漢籍資料の訓読などから「当時どのように読まれていたか」ということが精緻に研究されてきた。

本稿で取り上げる『南総里見八犬伝』は江戸時代の読本であり、多くの漢字にルビがある「総ルビ表記」の資料である。屋名池（2009）では、江戸時代の戯作や明治期の小説などに見られる総ルビの文章について、ルビの部分が本文の読みを表しており、ルビがなければ本文の読みが一意に定まらないことを指摘している。「総ルビ」と、「ルビなし」および一部の漢字にのみルビが付される「パラルビ」では送り仮名の付け方なども異なっており、両者の違いはルビの多寡だけではなく、それぞれ平安時代からのひらがな文・漢文訓読文を祖とする別個の表記システムであることが明らかにされている。

数詞は記数法などのルールを理解していれば本来ルビがなくとも後続する接尾要素などから語形が定まる可能性が高いものである。しかし、『南総里見八犬伝』には漢数字にルビがある例、ない例の両方が見られる。総ルビ表記資料において漢数字に対応するルビは「あってもなくてもよい」あるいは「無秩序に付けたり付けなかったりする」という性質のものであったのだろうか。ルビのあるものとないものの間に違いはないのであろうか。これは数詞の表記方法の問題だけでなく、総ルビ表記体系におけるルビの機能を考える上でも重要な点であると考えられる。以上の問題意識に基づいて、漢数字とルビの使用実態を調査する。

3. 調査方法

本稿では、文化11（1814）年から天保13（1842）年にかけて出版された曲亭馬琴『南総里見八犬伝』肇輯巻一（第一回）から第三輯巻五（第三十回）までを調査対象とした。調査にあたっては、高木元氏のWEBページ「ふみくら」で公開されている『南総里見八犬伝』のテキストデータを、国立国語研究所が公開する全文検索システム『ひまわり』の文字列検索機能によって検索し、漢数字「一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・百・千・万・萬・億・廿」の全使

用例を抽出した。なお、今回は作品本文中に現れる例を調査対象とし、広告・表題・目次・挿絵の解説などは対象から除外した。このデータをもとに、国立国会図書館蔵本の原本画像を参照し、全例のルビの有無を確認した。

今回は数詞として用いられる漢数字とルビとの関係を調査するため、上記の用例のうち数を表す用法でないものは調査対象から除いた。数を表す用法でないものとは、人名や地名などの固有名詞の一部に使用されたもの、漢語熟語の一部、後続部と合わせて特定の事物を指し示すものなどである[ii]。これらを除いた結果、1375例が得られた。このうち漢数字部分にルビのある例が832例、ルビのない例は543例とおよそ6：４の割合になっている。次節以降で漢数字とルビの使用状況を概観する。

４. 多表記性・多読性のある接尾要素

漢数字部分の分析に入る前に、接尾要素とルビの関係を整理しておく。総ルビ表記体系の資料においては、ルビが本文の読みを担保するためルビが示す語形と本行の漢字との対応関係に様々なバリエーションを生じさせることができる。漢数字に後続する接尾要素において、「同じ語に異なる漢字が対応している／異なる語に同じ漢字が対応している」例が見られるかを確認する。

ルビで示される語が同じで、対応する本行の漢字が異なるものは13組見られる。以下では最初にルビで示される語を示し、括弧内に対応する漢字のバリエーションを挙げる。これらは同じ語に対して異なる漢字が対応する多表記性を持っているもので、文脈に応じた漢字をルビに対応させていることが見て取れる。

かは（側／帯）　こ（個／箇）　こし（腰／刀）　すぢ（條／行）　たび（度／遍）　つ（箇／個／顆／才／歳／丁）　とき（時／晌）　ところ（方／所）　ひき（疋／頭）　ふり（揮／口）　むら（村／邨）　よさ（夕／宿／宵）　り（個／人）

一方、本行の漢字は同じで異なるルビが対応しているのは以下の22字である。基本的に同じ意味を持つ和語・漢語の語形が同じ漢字に対応しているパターンが多いが、「隊」字のように４通りの和語が対応している例もある。また、これらの他に「一女」が「いちぢよ」と「ひとりむすめ」に対応するという例も見られた。

合（うち／たち） 室（かど／ま） 行（ぎやう／すぢ） 隊（くみ／そなへ／て／むれ） 巻（くわん／まき） 郡（ぐん／こふり） 箇（こ／つ） 尺（さか／ざく／しやく／じやく） 隻（せき／は） 足（そく／あし） 丈（ぢやう／つえ） 町（てう／まち） 滴（てき／しづく） 條（でふ／くだり／すぢ） 度（ど／たび） 人（にん／たり） 年（ねん／とせ） 俵（ひやう／たはら） 歩（ほ／あし） 夜（や／よ） 宵（よ／よさ） 領（れう／かさね）

以上のように、総ルビ表記体系の「ルビが本行の読みを示す」という性質に支えられ、ルビが示す語と本行の漢字が1対1以外の対応をする例が一定数見られた。

上記以外の接尾要素は、基本的にルビによって示される語と漢字表記が１対１の対応をしているか、接尾要素にルビが付されていないものということになる。以下では漢数字・接尾要素それぞれに対するルビの付与状況に着目して考察を進める。

５．『南総里見八犬伝』における漢数字とルビの対応

5.1　漢数字にルビのあるもの

まず、漢数字にルビが付されている例を概観する。漢数字にルビがある例は、1375例中832例と全体の約6割を占める。漢数字にルビがある場合、後続する接尾要素はすべての例でルビが付されているか仮名表記されている。

5.1.1　漢語系統のルビが付されているもの

漢数字に対して漢語系統の語形がルビで示されている例は延べ398例ある。接尾要素は語形の異なりで94種、接頭辞は「第」1種のみが見られた。接尾要素は、以下の一覧に示すように漢語系統のものが多くを占めている。漢数字「一」「二」の用例が多いものの、一桁の数にはそれぞれ用例が見られる。一方、11以上の数にはルビのある例がほとんどない。漢数字「十」「百」「千」が単独で用いられる場合にはルビのある例があるが、位取りを表す用法でルビがあるのは「十一世（じういつせ）」「一百五十餘人（いつひやくごじうよにん）」「幾百歳（いくひやくさい）」など少数である。

【接尾要素なし[iii]】

一（いち）6　一（いつ）　二（に）5　三（さん）　一百（いつひやく）　一百八（いつひやくはち）　一二（いちに）3　数百（すひやく）2　数万（すまん）二八（にはち）　幾十百（いくじつひやく）

【漢語数詞＋漢語接尾要素】

一（いち）　宇（う）3　具（ぐ）管（くわん）　郡（ぐん）9　座（ざ）3　字（じ）5　丈（じやう）　女（ぢよ）2　女子（ぢよし）　條（でふ）　度（ど）2　人（にん）2　番（ばん）部（ぶ）2　枚（まい）文（もん）里（り）3　粒（りう）両（りやう）2　領（れう）碗（わん）7

一（いつ）　个國（かこく）2　函（かん）　季（き）　騎（き）4　曲（きよく）3　句（く）9　回（くわい）2　塊（くわい）　個（こ）　箇（こ）　國（こく）11　双（さう）2　杓（さく）　周忌（しうき）2　首（しゆ）2　升（せう）2　隻（せき）　銭（せん）　艘（そう）2　束（そく）　反（たん）3　町（ちやう）通（つう）10　挺（てう）3　滴（てき）2　点（てん）　等（とう）　盃（はい）頭（ひき）　俵（ひやう）　片（へん）2　編（へん）　遍（へん）2　歩（ほ）3　本（ほん）2

二（じ）　男（なん）

二（に）　个所（かしよ）　騎（き）　行（ぎやう）2　郡（ぐん）17　歳（さい）2　総（さう）　子（し）　字（じ／ぢ）2　陣（じん）　世（せ）　銭（せん）　代（だい）2　度（ど）　年（ねん）2　隻（は）　番（ばん）

三（さん）　个所（かしよ）　个年（かねん）　回忌（くわいき）　軍（ぐん）　間（けん）　國（こく）才・歳（さい）3　尺（ざく・しやく・じやく）4　字（じ）世（せ）4　層（そう）　男（なん）　年（ねん）6　疋（ひき）　方（ほう）2　面（めん）　文（もん）　里（り）4

四（し）　个字（かじ）　郡（ぐん）7　銭（せん）　足（そく）2　反（たん）2　面（めん）2　門（もん）3

五（ご）　巻（くわん）　枚（まい）

六（ろく）　尺（しやく）　代（だい）

七（しち）　貫文（くわんもん）　士（し）　旬（じゆん）　夜（や）　里（り）

八（はち）　字（じ）7　軸（じく）　人（にん）　年（ねん）

八（はつ） 行（こう）9　歳（さい）2　子（し）　士（し）　州（しう）4　町（てう）　方（ほう）11

九（く） 色（しき）

十（じう） 郡（ぐん）

十（じつ） 世（せ）

十一（じういつ） 世（せ）

百（ひやく） 年（ねん）　倍（ばい）13　里（り）

百（ひやつ） 歩（ほ）

千（せん） 騎（き）2　貫文（くわんもん）　行（こう）　歳（ざい）　里（り）

万・萬（まん） 貫（ぐわん）　人（にん）2　倍（ばい）

概数

八九年（はつくねん）　十餘世（じうよせ）　数十人（すじうにん）　数十世（すじつせ）　一百五十餘人（いつひやくごじうよにん）　幾百歳（いくひやくさい）
数百貫（すひやくくわん）　数百騎（すひやくき）　一千餘騎（いつせんよき）
千餘人（せんよにん）　百万騎（ひやくまんぎ）　千万句（せんまんく）　億万人（おくまんにん）　両三種（りやうさんしゆ）　5　両三町（りやうさんちやう）
両三度（りやうさんど）　両三日（りやうさんにち）　両三人（りやうさんにん）

その他

百分一（ひやくぶいち）　小六月（ころくぐわち）

【漢語数詞＋和語接尾要素】

二隊（にて）　百匁（ひやくめ）

【漢語数詞＋混種語接尾要素】

三个月（さんかつき）　五个月（ごかつき）　六个月（ろくかつき）　三四十二个村（さんし／かむら）

【漢語接頭辞＋漢語数詞】

第（だい） 一（いち）6　二（に）2　三（さん）2　四（し）2　五（ご）　六（ろく）　八（はち）　九（く）

【漢語接頭辞＋漢語数詞＋漢語接尾要素】

第一番（だいいちばん）6　第二番（だいにばん）　第二法（だいにはう）　第三番（だいさんばん）　第八回（だいはちくわい）

5.1.2　和語系統のルビが付されているもの

漢数字に和語系統の語形がルビで示されている例は、延べ434例ある。接尾要素は異なりで59種用いられている。延べ例数は漢語系統より多く見られるが、用いられている接尾要素は漢語系統の94種と比して少なくなっている。

【接尾要素なし】

十（とを）4　百（もも）3

【和語数詞＋和語接尾要素】

数詞と接尾要素が漢数字一字に対応するもの　一（ひとつ）9　一（ひとり）3　三（みつ）8　四（よつ）4　五（いつつ）　六（むつ）3　八（やつ）17　九（ここのつ）

一（ひと）　歩（あし）2　當（あて）　岌（かさ）　領（かさね）2　株（かぶ）　條（くだり）3　隊（くみ）　腰（こし）　刀（こし）11　声（こゑ）6　滴（しづく）　條（すぢ）11　隊（そなへ）2　顆（つ）4　箇（つ）2　個（つ）2　隊（て）3　時（とき）3　晌（とき）　年（とせ）5　日（ひ）3　筆（ふで）　揮（ふり）　口（ふり）3　室（ま）4　巻（まき）3　町（まち）　村（むら）2　邨（むら）　隊（むれ）　揉（もみ）　箭（や）　夜（よ）3　宵（よ）　宿（よさ）3　宵（よさ）　夕（よさ）　個（り）16　人（り）29

二（ふた）　打（うち）　がた4　側（かは）　帯（かは）2　郡（こふり）　鞘（さや）　條（すぢ）　才（つ）4　顆（つ）　隊（て）2　とせ2　年（とせ）2　葉（は）　日（ひ）2　庭（みち）　人（り）19

三（み）　打（うち）　か　日（か）　たび5　度（たび）　遍（たび）　人（たり）19　丈（つえ）2　才・歳（つ）2　隊（て）　方（ところ）2　年（とせ）14　重（へ）

四（よ）　日（か）　人（たり）2　年（とせ）　はしら

四（よつ）　房（ふさ）

五（いつ）　才（つ）　年（とせ）4　宿（よさ）

六（む）　才（つ）2　宿（よさ）

七（なな）　才・歳（つ）2　年（とせ）

八（や）　声（こゑ）　尺（さか）2　しほ4　隅（すみ）2　顆（つ）　所（ところ）

八（やつ）　子（ご）2　房（ふさ）

九（ここの）　才（つ）

十（と）　室（かど）　合（たち）　月（つき）　丈（づゑ）　年（とせ）5　尋（ひ

ろ）　重（へ）2

百（もも）　日（か）　遍（たび）6　とせ2　年（とせ）5　世（よ）

千（ち）　行（すぢ）　遍（たび）5　とせ　年・歳（とせ）2　曳（びき）　尋（ひろ）2

10の倍数

廿日（はつか）　二十才・歳（はたち）3　二十年（はたとせ）　二十尋（はたひろ）　二十重（はたへ）2　三十（みそぢ）　四十（よそぢ）3　五十（いそぢ）2　五十日（いか）　六十（むそぢ）5　七十（ななそぢ）　八十（やそぢ）3

概数

一両日（ひとひふたひ）二三合（ふたうちみうち）　三四日（みかよか）3　三四才（みつよつ）　再三たび（ふたたびみ）4　再三（ふたたびみたび）　両三歩（ふたあしみあし）　五六歩（いつあしむあし）　八九歳（やつここのつ）2　六七十（むそぢななそぢ）

月の異名

三月（やよひ）2　四月（うつき）4　五月（さつき）2　六月（みなつき）6　七月（ふつき・ふづき・ふみつき）7　八月（はつき）3　九月（ながつき）　十月（かんなつき）　十一月（しもつき）

その他

十（と）あまり七年（ななとせ）　三七日（みなのか）　二七夜（ふたしちや）　初七日（しよなのか・しよなぬか）

【和語数詞＋漢語接尾要素】

四（よ）　男（なん）　年（ねん）　里（り）

【漢語接頭辞＋和語数詞＋漢語接尾要素】

第四男（だいよなん）

11以上の端数のある数については、和語系統の「～あまり…」という語形のルビが付されている例は見られなかった。この形式を明示的に取っているのは、今回の調査範囲内では「あまり」を本行に表記する「十（と）あまり七年（ななとせ）」1例のみであった。

以上のように、漢数字・接尾要素両方にルビのある例は和語・漢語どちらにも多く見られる。いずれも「一」「二」をはじめ一桁の数を表す例が中心となって

おり、11以上の端数のある例が少ないことが指摘できる。

5.2　漢数字にルビのないもの

5.2.1　捨て仮名で語形を示すもの

次に、漢数字部分にルビが付されていない例を見てみよう。まず、漢数字部分にルビのないものの中には、捨て仮名を用いて漢数字または接尾要素の語形を示す例が延べ115例見られる。

漢数字に対して捨て仮名が付されているのは「一」のみである。捨て仮名「ト」または「チ」を付すことで「ひと」と和語で読むか「いち」と漢語で読むかを示している。「チ」が付してある例では「一チ日」のように捨て仮名がなければ「いちにち」「ひとひ」どちらの語形か確定できないものがあるが、「ト」を付してある例では後続する接尾要素にルビがあるか、接尾要素が仮名表記されているため、捨て仮名がなくても漢数字部分も和語で読むことが想定される例が多い。また、接尾要素に捨て仮名が見られるのは「人」に対する「ン」のみである。この形式を取る場合、漢数字にルビが付されている例はない。

【接尾要素が漢語系統】
一チ度（ど）　一チ日7　一チ夜（や）　一人ン8　二人ン2　三人ン4　四人ン　三四人ン3　四五人ン　六人ン　七人ン　七八人ン2　八九人ン3　十人ン2　十餘人ン　十四五人ン　数（す）十人ン2　数百人ン　八万人ン
【接尾要素が和語系統】
一ト撃（うち）一ト刀（かたな）3　一ト條（くだり）　一ト口（くち）3　一ト声（こゑ）2　一ト刀（こし）9　一ト言（こと）3　一トすぢ3　一ト畝（せ）　一トたび32　一トとせ　一トながれ　一ト雪崩（なだれ）　一ト大刀（たち）　一ト日2　一トわたり

5.2.2　接尾要素にのみルビのあるもの

漢数字部分にルビのないものの中で、後続する接尾要素にはルビがあるものは延べ231例ある。「ルビのない漢数字＋ルビのある接尾要素」の形式を取るのは、以下に挙げるように接尾要素が漢語系統のものが多くを占める。接尾要素部分が和語になっているのは「一時（とき）」「二鞘（さや）」「七才（つ）」「五千俵（た

はら)」の延べ4例のみで、他に片仮名表記の個数を表す「ツ」が44例、混種語の「～个月（かつき)」3例、「～个村（かむら)」1例が見られるにとどまった。また、数詞部分は11以上の端数のある例が多いことも特徴的である。

【ルビのない漢数字に後続する漢語系統の接尾要素[iv]】
个國（かこく／十） 个所（かしよ／五六） 个年（かねん／十二） 騎（き／二・三・八・十四五・二十・二百・百・千・二千・二三千） 句（く／二） 回忌（くわいき／七） 貫（くわん／五百・五千） 郡（ぐん／五十） 歳（さい／五・六・七・八・十・十一・十四五・十五・十六・十八・十九・廿二・六十二・四十三） 相（さう／三十二） 襲（しう／十） 尺（しやく／五） 所（しよ／三十六） 寸（すん／四五） 世（せ／十） 籤（せん／九十八） 銭（せん／三・五・六・八・九・十） 反（たん／百） 町（ちやう／三・八・十・十七八） 通（つう／数十） 條（でふ／十） 年（ねん／二・三・四・五・六・七・九・八九・十・十四五・十六七・四十・数（す）十） 羽（は／数（す）十） 倍（ばい／十） 俵（びやう／五千） 遍（へん／十） 歩（ほ／百） 本（ほん／五） 枚（まい／二十） 夜（や／十五） 餘騎（よき／三十・六十・二百・三百・千・一千） 餘國（よこく／六十） 餘町（よちやう／十） 餘日（よにち／四十・八十） 餘人（よにん／十・四十・二百・三百） 里（り／三四・十六・十八・三十） 両（りやう／三・十）

ここまで、漢数字または接尾要素にルビのある例を概観してきた。5.1で見たように漢数字・接尾要素両方にルビがある例は和語・漢語いずれにも見られるが、本節で見た接尾要素にのみルビがある例は漢語系統の接尾要素に特徴的に現れることが指摘できる。また、5.2.1で見たように、捨て仮名を用いる場合も和語では漢数字・接尾要素両方の語形を示すのに対し、漢語では接尾要素の語形のみを示していた。以上のことから、和語系統の場合、数詞と接尾要素を分けず、両者を合わせてルビの側が語形を明示するという性質が漢語系統に比して強く表れていると考えられる。一方、漢語は漢数字部分のみルビのない例が見られることから、数詞と接尾要素をそれぞれ独立した別の語として扱っていることが窺える。

5.2.3　漢数字にも接尾要素にもルビのないもの

次に、漢数字にも接尾要素にもルビがない例を確認する。延べ197例が該当する。用法ごとに、現れた形式を異なりで挙げる。

人数　一人　七人　十人　十二人　五六人　七八人　五十人　六十人　五六十人　二三百（の士卒）　三四百（の壮士）　五百（の軍兵）
年齢　十一　十一二　十五　十二三才　十四五　十七　四十二　六十八　六十　四十
日数（算日用法）　三日　四日　七日　四五日　五六日　七八日　三十五日　四十九日　四五十日　六十日　七十五日　百日
日数（暦日用法）　七日　十日　十一日　十三日　十六日　十七日　十八日　十九日　廿日　廿九日
暦の月　二月　三月　四月　五月　六月　九月　十月　十二月
年数（元号とともに用いられるもの）　二年　三年　五年　九年　十一年
その他　一町　五六町　五六寸　六寸　八九寸　（その数）三十　（撃こと）五六十　十に八九

5.2.2で見た接尾要素にのみルビがある例と同様に、ここでも11以上の端数のある例が多く見られる。接尾要素にもルビがないため語種・語形ともに断定することはできないが、位取りが必要となる11以上の数については記数法に則って語形を読み手が決定するように表記されているのではないだろうか。

また、「享徳（きやうとく）三年十二月」のように、元号を伴って年月日を表す場合、接尾要素「年」「月」「日」字にはルビが付されにくい傾向がある。一方、算日用法の接尾要素「日」では、「一日」・「二日」（ひとひ・いちにち、ふたひ・ふつか）など複数の読みが想定されるものには全例にルビがある。「年」字も「ねん」「とせ」の読みが考えられるが、年数を数える例では「年」字にはほぼ全てルビが付されており、語形が明示されている。暦日用法の場合、「年」は漢語系統の語形、「日」については「ついたち」「ふつか」とある程度語形が固定化していると思われ、ルビで語形を明示する必要性の低いものであると考えられる。なお、「月」については、ルビのあるものはすべて5.1.2で見たように「ながつき」などの月の異名を示しており、「～ぐわつ」のルビがあるものはなかった。

漢数字にも接尾要素にもルビのない例は、「年」「月」「日」「人」など使用頻度が高い限られた接尾要素のみに見られる。接尾要素部分についてもルビによる語形明示の必要がない、習慣的に読み手が語形を想定できるもののみがルビなしで現れることができると考えられる。

6. 近代新聞との対照

ここまで、『南総里見八犬伝』を資料として江戸時代の総ルビ表記資料における漢数字とルビの関係について述べた。次に、こうした表記の特徴が近代以降どう変化したかを確認するために同じ総ルビ表記の資料である明治期の新聞と対照する。

ここでは明治期の代表的な小新聞である『読売新聞』を使用する。総ルビ表記の資料であり[v]、新聞という媒体の性質上、数詞が多く現れるためである。『日本語歴史コーパス明治・大正時代編Ⅴ新聞』所収の『読売新聞』1875年刊行分のデータを用いて、漢数字に対するルビの使用状況を調査した。

同資料中の数詞として用いられた漢数字のうち、ルビの付されている例は1029例中166例で16.1%を占める[vi]。同じ総ルビ表記体系の資料ではあるが、『南総里見八犬伝』とは異なり漢数字に対するルビの使用が少なくなっていることがわかる。

『読売新聞』1875年のデータで漢数字にルビがあり、語形が明示されているものは以下のとおりである。166例のうち63例を「一人（ひとり）」が占めており、『南総里見八犬伝』と比してルビの付されているもののバリエーションは少なくなっている。

【和語系統】

一ツ（ひと）13　一品（ひとしな）　一太刀（ひとたち）　一度（ひとたび）2　一突（ひ／つき）　一年（ひととせ）一間（ひ／ま）2　一棟（ひとむね）一人（ひとり）63　一個・一箇（ひとり）　一猪口（ひとよく）　二ツ（ふた）二親（ふ／おや）　二言（ふたこと）　二藥（ふたしな）　二月（ふたつき）　二尋（ふたひろ）　三言（みこと）　三品（みしな）　三筋（みすじ）2　四（よツ）ツ　七（なな）ツ　十（とを）　十度（とたび）

【和語・漢語が混ざっているもの】
四人（よにん）五度（ごたび）　八町（やちやう）
【漢語系統】
一（いち）3　一圓（いちえん）3　一度（いちど）　一日（いちにち）　一等（いちばん）　一枚（いちまい）一文（いちもん）2　一箇所（いつかしよ）一件（いつけん）7　一軒（いつけん）一寸（いつすん）　一銭（いつせん）　一艘（いつそう）　一通（いつつう）　二階（にかい）7　二歳（にさい）　二朱（にしゆ）　二重（にぢう）　二疋（にひき）　二分（にぶ）　三人（さんにん）2　三分（さんぶ）2三幅（さんぷく）七度（しちど）　十（じふ）　十銭（じつせん）　三十（さんじふ）　何十間（なん／けん）　百（ひやく）2　百圓（ひやくえん）　百日（ひやくにち）　百年（ひやくねん）　三千五百萬人（まんにん）　千圓（せんえん）　千有餘年（せんいうよねん）

また、漢数字にルビがなく、接尾要素にのみルビがある例は390例ある。「圓（えん／ゑん）」53例、「人（にん）」26例、「年（ねん）」24例、「銭（せん）」23例、「等（とう）」22例、「號（がう）」22例など、95％以上が漢語系統の接尾要素である。接尾要素のみにルビがある例で和語系統と認められるのは、「一人（り）」19例、「樽（たる）」4例のみである。『南総里見八犬伝』と同様、接尾要素にのみルビがあるのは漢語系統のものという傾向が読み取れる。

漢数字にも接尾要素にもルビがない例は473例ある。この中には「年」42例、「月」104例、「日」165例が含まれ、そのほとんどが暦日用法となっている。これも『南総里見八犬伝』で見られた暦の日を表す用法にはルビを付さないという方向性が引き継がれているものと考えられる。

以上のように、『読売新聞』1875年のデータにおいては『南総里見八犬伝』と比して数詞として用いられる漢数字にルビを付ける割合が著しく低下している。しかし、漢語の接尾要素のみルビで語形を明示する、暦日用法の「年」「月」「日」にはルビを付さないなど、『南総里見八犬伝』と同様の漢数字とルビの使用傾向が確認できた。ルビのある接尾要素に漢語が多いことからもわかるように、『読売新聞』では漢語の接尾要素の使用割合が増加している。和語の接尾要素自体が用いられることが減少したために、ルビで漢数字や接尾要素の語形を示す例も減少したと見られる。また、『南総里見八犬伝』では5.1.1で見たように、一桁の数

詞の場合は漢語系統の接尾要素が後続しても漢数字にルビのある例が多く見られたが、『読売新聞』では一桁の数詞も含め、漢語系統の接尾要素が後続する場合は漢数字にもルビを付さないという方向へと進んでいったものと考えられる。

7. おわりに

以上、江戸時代の読本『南総里見八犬伝』を資料として、主に語種の観点から総ルビ表記の資料において数詞として用いられる漢数字とルビの対応関係を整理した。『南総里見八犬伝』では、以下の3点が指摘できる。

① 語種にかかわらず一桁の数はルビで語形を示す傾向が強い
② 11以上の端数のある数を表す場合、ルビで数詞の語形を明示する例は少ない
③ 和語系統では常に漢数字・接尾要素両方にルビが付されるのに対し、漢語系統では接尾要素のみにルビを付す形式が使用される

和語系統の数詞に関しては、③に挙げたように漢数字・接尾要素ともにルビが付されていることから、数詞として特別な表記をするのではなく一般の語と同様にルビが語形を示す形式を取っていると見ることができる。漢語系統の接尾要素では漢数字にルビのない例が見られることから、数詞と接尾要素を別の要素として扱い、数詞部分に関してはルビで示される接尾要素の語形に基づき記数法に則って語形を決定するシステムを取っていると考えられる。『南総里見八犬伝』では11以上の数を中心とした一部の例でこのシステムが取られていたが、『読売新聞』ではその適用範囲が一桁の数にまで拡大し、ルビのない漢数字が大きく増加することになったのである。

本稿では『南総里見八犬伝』での漢数字とルビの使用状況を確認するにとどまり、他の読本作品や総ルビ表記資料については触れられなかった。また、明治期以降に起こる総ルビ表記体系自体の形骸化との関連も十分に述べられなかった。調査範囲を拡大し、数詞の機能・用法についても精査することを今後の課題としたい。

使用資料

国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス　明治・大正編Ｖ新聞』
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#shinbun（2022年８月31日確認）
国立国語研究所　全文検索システム『ひまわり』
https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari（2022年8月31日確認）
国立国語研究所　全文検索システム『ひまわり』／『ふみくら』パッケージ
https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fumi（2022年8月31日確認）
国立国会図書館デジタルコレクション　曲亭馬琴『南総里見八犬伝』
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2607038?tocOpened=1（2022年8月31日確認）
高木元氏ウェブサイト「ふみくら」『南総里見八犬伝』本文テキストデータ
https://www.fumikura.net/text/hakkenden.html（2022年8月31日確認）

参考文献

岩田一成（2013）『日本語数量詞の諸相』くろしお出版
築島裕（1965）「日本語の数詞の変遷」『言語生活』166号 pp.30-37
三保忠夫（2000）『日本語助数詞の歴史的研究』風間書房
三保忠夫（2004）『数え方の日本史』吉川弘文館
宮地敦子（1972）「数詞の諸問題」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座2　名詞・代名詞』pp.56-78 明治書院
安田尚道（2015）『日本語数詞の歴史的研究』武蔵野書院
屋名池誠（2009）「総ルビの時代」『文学』10巻6号 pp.117-130

註

i　本稿では、数や事物の数量を表す「基数詞」、事物の順序を表す「序数詞」を合わせて「数詞」と総称する。数の意味を持つ漢字を「漢数字」と呼ぶ。本文中で数詞としての数に言及する際は半角の算用数字を用い、漢字としての漢数字について述べる場合は「一」のように鍵括弧を付して表記する。また、数詞の後ろに現れて事物の単位や個数・量などを表す助数詞と呼ばれるもの、普通名詞としても用いられる語が数詞の後ろに付いて数量を表す用法となるものを合わせて「接尾要素」と呼ぶ。

ii　用法にかかわらず広く数詞の表記の全体像を捉えるため、基数詞として用いられるものだけでなく序数詞や暦の年月を表すものなども調査対象とした。ただし、「一族（いちぞく）」「一念（いちねん）」など数量を数える意味の希薄なもの、「三伏（さんぶく）」「三宝（さんぼう）」など特定の事物を指し示すもの、「八面六臂（はちめんろっぴ）」など四字熟語・故事成語の一部となっているものなど1415例を除

外した。なお、これらのうち漢数字部分にルビがないのは314例で、人名の「七郎」「八郎」「蟇六」などの漢数字部分289例がその多くを占める。

iii 5.1の挙例に際しては、用例を接尾要素のないもの（数詞単独のもの）と接尾要素のあるものに分けて掲載する。接尾要素のないものについては漢数字に付されたルビを括弧内に示す。接尾要素のあるものについては接尾要素の語種で分類したうえで、ルビで示される漢数字の語形ごとに後続する接尾要素をテキストに現れた表記に従って挙げる。括弧内には接尾要素に付されたルビを示す。いずれも調査範囲内に複数回現れた場合は括弧のあとに算用数字で出現回数を示す。数字のないものは1回のみ使用されたものである。

iv 該当する接尾要素を五十音順に掲げ、括弧内にはルビで示された語形を記し、／の後に調査範囲内で当該接尾要素の前に現れた漢数字をすべて掲げた。

v 『日本語歴史コーパス明治・大正編Ｖ新聞』を用いて、1875年の『読売新聞』データに現れる語のうち漢字表記が含まれる語を抽出し、語ごとにルビが付されているか否かを判定した。語の一部にでもルビが付されている場合はルビありの用例として扱った。全漢字表記語に対するルビの付与された語の割合は85.2%であった。

vi 1875年の『読売新聞』を検索対象とし、検索アプリケーション「中納言」を用いて品詞が「名詞-数詞」のものおよび短単位認定上普通名詞の扱いとなる語彙素「一人」に該当するものを全例抽出した。誤解析と思われるデータを除き、各例にルビが付されているか否かを判定した。

【謝辞】本研究はJSPS科研費19K13211の助成を受けたものである。